# 私は女神と

茨田　凛

私の愛した魔法は薄暗闇。薄い、暗い、闇。眩い黄金の陽でも、なめらかな漆黒でもない。淡く透けた空間。そこで確認出来るのはほんの少し。自分の手の平と彼の輪郭。焼けた首筋は震える指を、柔らかなシャツはひび割れた唇を、無言で受容してくれる。音のない音というものを信じてくれるだろうか。そこにある水の音。滴る雫も、その上で遊ぶ小鳥もいない湖。あるいは、釣瓶の落ちない井戸のような。蔦に絡まれ朽ちていく喜び。感覚は温い毛布に包まれながらも、獣のように研ぎ澄まされる。ぼかされた視界に野生的な息遣いだけが、不釣合いに流れる。眠っていく体の奥、快楽に爪を立てる。内と外でない交ぜになる思考。捩れた針が逆回りする。ああ、と口から声が漏れるけれど、それが何のためであるか誰のためであるか、まるで分からない。妄想は黒く黒く溶けて、螺旋階段を転がるように落ちていく。

椅子に座らされて目隠しの遊戯をする夢。目覚めると太陽はすでに天高く上っていた。長い髪が顎の下にへばり付いている。のろのろと払いながら唇を噛んだ。どうしてこんな夢見るんだろう。私が欲しいのは真暗じゃない。薄暗闇。濡れていない、暖かな地中で眠る生命の快楽。

南向きの部屋は明るかった。カーテンを通しても強い日差しが、部屋の影を濃く映し出している。タンス、本棚、鏡台、私の寝ている布団と、その上で身を起こす私と。時折外を走る電車に合わせガタガタ揺れる。その振動が周期的なものであるから、生を感じた。羊水の中目を瞑る胎児のように、ひしゃげた揺り籠で、街の心音を聞く。黄ばんだ畳だけがこの空間を支えていた。腐らせることなく、琥珀に満たして。触れば砂になり風に乗るような、そんな脆くも美しい存在を空気中に醸している。

私は布団から出てそれを畳んだ。このまま眠っていてはいけない。矛盾だらけの空間に押し潰されて、ミイラになってしまいそうだ。服を着替えて靴を履く。潤っているのにどうしようもなく乾いた部屋。ふと思い出す。掃除当番で遅くなった日、一人で歩くグラウンド。まっさらな土の表面に、ごく淡い紅茶色の光が踊っていた。自身の瞳までが輝くのを意識した瞬間、息を止めそうになる。ランドセルの肩掛けを握り締め、雲一つない空を見上げた。あの水色に溶けられるような気がしていた。

乾いた空気に包まれて、秋は全てのものが色褪せて見える。けれどもそれに触れれば、心は水に浸る。喉元までたぷんと揺らいで声が出ない。涙が出そうな程に。

しかし踏み出した世界は、まだそこまで秋めいていなかった。部屋を出て鍵を掛け、薄い鉄の階段を降りる。車の出払ったアパートの駐車場では、小さな子供が三輪車を漕いでいた。そこから離れ、少し古びた民家に挟まれている小道を抜け、表通りに出る。並木道を通っても、見上げる葉は未だ青かった。路上に落ちた一枚を摘まむ。風に耐え切れなかったのだろうか。落ち葉というにはあまりに若く、陰鬱な緑が鼻につく。表面を泳ぐ脈は落ちてしまった後でも、その模様をしっかり浮かせていた。ああ。この、葉脈というもの。吐息を掛けずにいられない。生きているものには必ずといっていい程模様があるのだ。どんな表面にも線が引かれている。つるりとした爬虫類さえ、近くで見れば鱗が点描だ。猫だって犬だって、皮を剥いでしまえば私達のよう。無様な肌色に細胞の刻印。私という一固体がすでに集合体であるという証。一つから無限に近い粒子を得て、私達は世界に顔を出す。分裂。一つを二つ。二つを四つ。体を刻んで増殖。この分裂に痛みは伴わないのだろうかとふと思う。まるで元々そうであったかのように、自然な分かれ方なんだろうか。沼の淵に波紋が溶けていくような、吸収されていくようなリズムを持っているのかもしれない。それとも脳が感知していないだけで、痛み自体は体に残っているのかも。成長痛などはどうだろう。

急に立ち止まって、葉なんて摘まんだままで。それでも考えることを止められない私は、だからこそ社会に不適合だ。不思議。何故自分の一部が千切れているのに痛みを感じない。欲と同じだろうか。より強く生きていくために、醜さを無視する。健常を保つため、私達は生まれながらに痛みを捨てている。

捨てる。本来考えなければならないのはこういうことなんだろう。親指と人差し指を離す。摘まんでいた葉が風に流されていった。歩き出す。考えることを止められないのなら、別の方向に歪曲させればいい。妄想の淵に嵌まる前に、少しでも現実に指を掛けたい。今の状況を変えなければ。ずっと思考を弄んでいられたのはあの庭でだけ。灰色の小鳥。小屋で飼われたる女神。私はもう、あの庭と決別したはず。

まともな人間になりたい。世界中に散らばっている知らないを、手当たり次第ひねり潰して。生きていく資格を、条件を、足元に積み上げなければ。

でないと、誰も泣いてくれない。

はっきり憶えているのは雨が降っていたこと。コンクリートの上、たくさんの黒い靴。私の足元も黒だった。皆細かな水滴を載せじっとしている。二月。慣れないストッキングがとても寒かった。今までずっと紺色のハイソックスだったから。薄い布地は肌に温みを与えない。

濡れた海草のように足を触る。身動きも出来ず私は立ち竦んでいた。

確かあの時、私は傘を差していなかった。両腕に父の遺影を抱いていた。後ろで誰かが傘を差していてくれたんだなあと思う。祖母も母の遺影を隣で同じように抱いていたから、あれは祖父だったんだろうか。違う。もっと背の高い男の人だった気がする。ただ黙って、背中に触れそうなくらい私の傍にいてくれた。そんな優しい人の顔も、馬鹿な私は憶えていない。曖昧だ。立ち上る煙も、経の音も、人々が語る父や母についても。まるで思い出せない。強く抱いていたのは雨のイメージ。途切れない音は静寂だった。空を、大気までも灰色に塗っていく。私を濡らさなかった雨。濡れたいと思わなかった私。つま先から冷気が這い上がってくる。歯がカタカタと鳴った。

昔デパートの九階のカフェでお茶を飲んだことがある。透明のカップで、朽ちた花弁を載せたカモミール・ティー。こんなところに一人で行く訳がないと思うから、きっと誰かと一緒だったんだろう。けれどどんなに記憶を探っても、そこにいるのは私一人だった。勿論、周りのテーブルには客がいる。ざわめきの中、私だけに連れがいない。外に向いた壁全体がガラス張りで、展望室のような一角だった。白くて丸い小さなテーブルと、玩具のような赤い椅子。サテライト、という言葉が不意に浮かぶ。そのカタカナ語の意味を私は知らない。聞いたことがあるだけだ。銀色のような金色のような、それでいて白としか言いようがないような。真っ直ぐ伸びる線のようで、ずっと奥まで広がるタイル張りの空間みたいな。そういう言葉だと思う。空に近いところにいると心が晴れ晴れした。足の裏に穴が空いて、そこから風が吹き込んでくるような感じ。胸のちょうど真ん中がハッカに似た芳しさで冷える。後ろから見知らぬ人達の声が聞こえていた。それは私に何の情報も与えず、目に映る雲のみが、頭の中を流れていく。脳内がパノラマ写真のように広がって、一面の空になる。その青は海に似ていた。入道雲は帆をいっぱいに広げた船。ゆっくりと、ただ過ぎていく。

授業の始まる五分前。近いはずの喧騒は遠く、狭い窓に不釣合いな記憶を重ねていた。共通するのは風の吹く心だけ。さっき電子辞書で調べたサテライトという言葉の意味は、衛星。回る彼ら。光るのは孤独だからだろうか。

再びここに通い始めてから一ヶ月。アパートから歩いて二十分程のところにある女子大だった。常緑樹で囲まれた敷地の中央には、ここのシンボルであるチャペルが建つ。白亜の漆喰に虹色のステンドグラスが鮮やかだ。

それに比べると、校舎は極めて惨め。天井を見上げた。剥き出しの蛍光灯が一本、ジリジリと瞬いている。教室の中では何もかもがつまらない。檻みたいだなんて、陳腐に例えてみる。「女子大生」という種類の動物を無造作に投げ込んだ檻。外から見ればきっと同じだ。教室の真ん中で笑っている娘と、窓際で呆けている娘と。模様や毛並みの違いなら、飼育員が見分けてくれるかもしれない。だが、その他大勢は。ある集団を檻で囲んで、名前をつけて、そうして世界が作られていく。「小娘」「アパートの住人」「隣人」「乗客」「雑踏」。目の前に広がる鉄格子と無感動にさげられたプレート。檻の外に人はいない。固い仕切りに内も外もなかった。全員が猛獣であり飼育員だった。見世物にされながらも、鍵束を握り締め誰かを飼っている。また、檻の中に一人でいるは殆ど人いない。大抵何人かとともに押し込められていた。私も集団の中で肩を縮めている。私に「私」というプレートをさげてくれる人は一人もいないのだ。

　冴えない部屋に似合いの、薄っぺらな笑い声が響く。何か人を落ち着かせる効果でもあるのか。真っ白でなくわざと黄ばんだ色をした壁が嫌いだ。等間隔に並んだ長机。養殖場に巡らされた網のような配置。女の子達の服は、キャンディの包み紙をそのまま被せたみたいに鮮やかだった。その中で、似合いもしない感傷に浸っている自分を見つけてしまった。

　私はまた、ロサに会いたがっている。

　もう嫌だ、もう嫌だ。ここは明る過ぎる、生ぬるい、冷たくない、熱くない。それに、音が違っていた。ここではあそこと違う音がする。世界が広すぎて、壁が歪んでいて、どんな声も不愉快に跳ね返ってくる。笑い声が笑い声でしかない。大き過ぎる声が、体にぶつかって痛いのだ。あそこの声はぶつからない。私の耳に、体に、一点から注射のように入ってくる。ボソボソした彼の声が、ボソボソしたまま耳に触れた。あそこでの音は聴覚以外の何かを常に伴っていて、逆にそれ以外のものも聴覚と同じ機能を持っていた。例えば光。降り注ぐそれに私は音を感じていた。透明や赤や銀や、たくさんの色を見るたび胸に広がる波紋。朝はゆっくりと竪琴をついばむように。夕方は遠くでベルを鳴らした。波紋は小さな輪になって鼓膜を揺らしていた。あそこでは全ての感覚が手と手を取り合っている。彼らの統べる愛は狂おしく私を包んで、世界に溶かしてくれるのだ。つまりはそれが女神であった。ロサの前で私が見せかけたかったもの。私が持っていたたった一つのプレート。錆びた鳥籠に掛けられたちっぽけな名前を、弄ぶ鍵番もまた一人だけ。

　昼過ぎ。フェンスをよじ登って工場内に入った。かつて彼と出会った場所には守衛がいて、入れそうになかっ

たので裏に回ったのだ。フェンスから降り、芝生に膝と手をつく。季節が変わってもそれは青いままだったが、感触が夏と違っていた。肌を切るような鋭利さはなく、ただ柔らかに押し潰される。こんなささいなことにさえ唇を噛んだ。

私が入り込んだのは木の密集している箇所。緑の隙間から建物や道の灰色が見える。中に入れば何とかなると思っていた。しかし立ち上がり周囲を見渡しても、自分がどこにいるのかまったく分からない。工場の敷地は広いのだ。制限された身の上で知り尽くすことなんて出来なかった。やはりここは生産性重視の利益を追い求める場所であって、私達の庭ではないのだ。広大な敷地は異端者を飢え殺させる迷路。もしくは水攻めの回廊。水攻め。こっちの方が近いかもしれない。横に並ぶ扉のどれかを選べば逃れられるのに、ただ追われ突き進む。そんな妄想に押し潰されそうになりながら、私は這いつくばるように歩き回った。目に入るのは、似たような木と似たような建物のみ。誰かに見つかるかもしれないという不安も相まって、精神の針が振れ幅を超えそうだ。一度道に出ればいいのかもしれないが、震える足がどうしてもさせなかった。

惨めだと思う。あの時ならもっと美しく迷えたろうに。小鹿のような足を伸ばして、鶴のような腕を振って。銀色の森の中、探しに行けた。歩いても歩いても、妖精の足は疲れを知らず、朝靄に弧を描く。けれど今では清浄を失くした女の足が、虚しく地を鳴らしているだけだ。頭が重くなる。大した時間歩いてもいないのに、しゃがみこんでしまう。やはり、駄目なのか。体力のなさが身に染みて涙が零れた。もう取り戻せないのか。きっかけ、偶然。何ものを積み上げても得られない宝玉。一つ指紋を付ければ、色も光も消えていく。袖で涙を拭った。諦めよう。自分にそう言い聞かせた時、くっきりとある音が聞こえてきた。

カション　カション

バサ　バサ

単調な音の連なりが細切れの映像のように響く。音の方を目指した。地を踏むごとに、足が一瞬ずつ痺れていく。鳥の羽ばたきのように、映写機のように、世界が切り替わる音。だんだん強く、私を切り裂いていく。木の間をすり抜け、開けた場所に出る。眩しい光の中、彼を見出していた。

「ロサ」

脚立に上って枝を切っているロサ。高い場所にいる彼の背に光は降り注いでいた。口から呟きが自然に漏れてくる。振り返らない彼を、もう一度呼んだ。

「ロサ」

枝切り鋏を持つ腕が降ろされた。首が一度傾いで、黒い髪も揺れる。

「……」
あっけなくロサの顔を見た。何度も思い描いては打ち消していた像と、随分掛け離れていた。肌の色や眉の形が想像と一致しない。肌はもっと黒く、眉はもう少し細かったような。とんでもない人違いである気がした。
「君？」
脚立に乗ったまま彼は尋ねた。その声も考えていたものより幾分高い。こんな人だったろうかと不安になる。私は俯いた。軽い金属音が聞こえる。彼が脚立から降りる音だ。それが四回響いた後、地を踏む僅かな振動が真っ直ぐこちらに向かってきた。
「君なんだろう？」
「ええ」
すぐ傍に来て尋ねられた。返事をすると、彼はにひゃりと笑う。何をしていいか分からないでいる私に、手を差し伸べてくる。
「こんなに早く会えるなんて光栄だよ。庭も随分変わった。案内してあげよう」
さあ、という彼の手を掴んだ。それは昔触れた時と同じで冷たく湿っていた。鳥肌がたつ。彼は歩き始める。胸に生じた不安も確定しきれない内に、私は引きづられていった。
「あの、小さな赤い花もバラ？」
「そうだよ。ミニバラ。レッドキャスケード。柵なんかに散らしておくと愛らしいだろう？」
「うん」
人気のまったくない工場。ロサは私の手を引きずんずん歩いていく。一度も立ち止まらない。何度も建物の影に入ったり、日の下に出たりして。瞳孔が絶えず動く。昔見た映画を思い出した。主人公である写真家が、逃げるように駆け出した恋人を撮るシーン。アングルの違う絵が何枚もスクリーンに映し出されていた。陽光、落ち葉、木漏れ日、雫、笑顔。台詞の少ない短編映画。タイトルは思い出せない。ただ、あの転がるように反転する構図。それだけが頭を離れなかった。
秋の庭は夏と異なる。生命というよりは飾りとしてのバラだと、歩きながら思った。さっき見たレッドキャスケードがそうだ。閉ざされた窓の格子に絡ませてあった。そのポツンとした赤が、イルミネーションの電球を思わせる。バラらしい形がどこか玩具めいて滑稽なのだ。蔦が細いから余計コードらしい。他の花にも似たような趣があった。葉が夏のように青々としておらず、赤や黄、白、ピンクなど鮮やかな色ばかりが空中で浮き立っている。大輪の花には、萎んでもなお漂う風船を思い浮かべ

た。きちんとした形を保ってはいても、そこに蓄えられている水量が明らかに少ないのだ。強がり隠すかのように、上向きに咲いている花が多い気がした。その姿はどこか重苦しく、夏より存在感を増したようなのに、水彩をさらに薄めたような切ない色合いもしている。ロサによる早口の説明を聞きながら、それらの間を駆けていった。

中央を走る道を横切り林に入る直前、見知ったバラを目にする。肌色に近い淡いピンクの花弁。色が多少昔見たのと違う。しかし開ききった形が完璧な円の、あの花を見たことがある。

「あれって、ペネロープ？」

腕を引き立ち止まった。彼の足が少しもつれる。

「ああ、そうだよ」

位置で憶えているのだろう。返事はすぐ返ってきた。手を放される。彼のつま先が地面を二回叩いた。靴紐がぺちぺち音をたてた。

「四季咲きと言ってね。夏に咲いた花が秋にもまた咲くんだ。オフィーリアとセプタードアイルもそうだね。気立てがいいのさ。一季咲きの気高さも好きだけど、彼女たちのそういうところが、僕は愛らしいと思う。道で擦れ違った時、こちらが気づかなくても挨拶してくれる娘のような、素朴で美しい」

言い終わるとロサはバラに近寄り、その一つを二回ついた。それから私の手を取る。

その時ポツリと鼻に何か当たった。水滴、雨だ。頭上には一面、灰色の雲が広がっている。ロサも気づいたのだろう。空を見上げていた。

「やっぱり」

降ってきたか、と彼は口の中で呟く。

「行こう。小屋に入ろう」

ぐっと手を引かれる。雨は小粒だが勢いが強い。数秒にしてアスファルトが斑になった。数分後には全て、鉄紺色に染まっていくだろう。静かな切り替わりが心に線を引いた。

思い描いた想像とのズレが、どうしてこうも引っかかるのだろう。構造も変わらないし汚れてもいないのに、小屋が以前よりみすぼらしく見えた。月日というのは人と人だけではなく、人とものとの距離まで離してしまうのか。

「上がって、座って」

私を先に入れてからロサは戸を閉めた。鍵を閉める音もした。言われたままもぞもぞ靴を脱ぎ上がる。白杖がいつもの位置に立て掛けられているのが目に留まった。そういえば、さっきから彼が白杖を持っていなかったことに気づく。作業には邪魔だということなのかもしれな

い。きっと杖なしで歩けるぐらい慣れてきたんだろう。
「ちょっと待っててくれないか。今、お茶を入れてあげるから」
ロサは下にある戸棚からヤカンを取り出し、水を入れ火に掛けた。戯れに弄ったことがあるから、ガスが通っているのは知っていた。でもこうやって小屋に二人いて、ヤカンに火など掛けていると不思議だ。昼寝をして目覚めた夕方の気持ち。起き抜けの靄がかった感じと肌寒さ。それに小さな笑いが漏れて混じっている。ロサは靴を履いたまま畳にだけ腰掛けていた。ちゃぶ台の横に座る私に背を向けている。コーっというコンロから漏れる音が耳に心地よい。雨の降る音は聞こえなかった。きっと霧のように真っ白い雨が、小屋を包んでいるんだろう。私は掛ける言葉が見つからなくて、彼の体に触れてみたいとそればかり思っていた。何のやましさもなしに、ほのぼのと思い描く。肩に両手を載せたり、後ろから首を掴んだり、軽く襟や裾を引っ張ったり。意味を持たない接触なら、後の言葉を考えなくていいと思った。彼が振り返ったら、幼い子供のように笑っていればいいんじゃないだろうか。反応を期待しているのに、それを導くための行為は想像の枠を出ず消えていく。もう考えに出してしまっているという時点で、こういうものは不可能だと悟った。思考したらもう、無邪気な行動もただの理詰めだ。

ヤカンから白い湯気が上がる。気泡の弾ける微かな音がした。
「もうか、早いな」
呟きながらロサは立ち上がり、戸棚から唐草模様のティーポットと、中央がうっすら緑色の湯飲み、コーヒーのビンを取り出した。ポットを軽く濯ぎ、そこにビンの中身を慎重に傾け入れる。ビンに入っているのはよく見ると茶色い粉ではなくて、赤い鰹節のようなものだった。湯を注ぎ蓋を閉じ、ロサはポットをちゃぶ台の上に置いた。ビンは戸棚に戻して、湯飲みを濯ぐ。水気を軽くきって、同じくちゃぶ台に持ってきた。今度は彼も靴を脱ぎ上がってくる。私の丁度正面に座った。相変わらず見えているのかいないのか、分からない人だとつくづく思う。
「秋の庭というのは」
おもむろに語りだす声音。だんだん実際のものとイメージの声が重なってくる。今そこにある方の、比重が高くなる。こういう声、こういう声。心の中で何度も頷ずけば、塗り替えられていく。自分の中にあるものが本物の声に抱かれ、やんわりと同化する。
「綺麗なものだろう。上品で寂しげで。頬に当てると花弁が冷たいのがいいな。葉が茂っていないから、風の流れがよく分かる。舐めたくはないんだ。ただ、匂いに涙が出そうになる」

滑らかに語ってしばらく黙る。そうしてから口の中で呟いていた。バラの名前だ。バレリーナ、アイスバーグ、ボリショイ、カマンダン・クストー、ソニア・リキエル、セント・セシリア。果実から散る雫のようなカタカナ語が、彼の口の中でごろごろと回される。居心地の悪さが胸を占めた。名前からその花形を思い描こうとしても難しい。サササ、と窓が鳴る。風が一瞬強く吹き、雨が打ちつけたのだろう。時々鳴るそれに耳を傾けながら、時間はゆっくりと過ぎていった。シュネー・プリンセス、ホワイト・コスター、ロココ、ジュリア、レダ――。

そうしている内にお茶が入った。ロサがポットを傾けると、ごく淡いオレンジと茶を混ぜたような色の液体が湯飲みに注がれる。湯気と同時に酸味の強い香りが鼻をくすぐった。急に喉が渇いてくる。どういう種類のものなのかも知らずに、湯飲みを口に運んだ。

「ロサ・カニーナって憶えてる？」

ロサ。彼と同じ名前を持つ花。聞いただけでは、その色も香りも思い出せなかった。何とも言えない味が口の中を満たす。緑茶とも紅茶とも違う。烏龍茶に近いだろうか。初めの味は白湯に等しい。後味が異国の茶を思い出させた。喉の奥と舌の淵を撫でるのは独特の風味。熟れた果実のようでもあり、風化した香草のようでもある。初めて飲んだはずのものなのに、どこか懐かしかった。好きでもないのに日常的になってしまったもののような、妙な親しみを感じる。

「その実を乾燥させてお茶にするんだ。ローズヒップティー。前にも言ったね」

「う、うん」

どもりながら頷いた。立ち上る湯気が鼻の頭を湿らせる。ロサの名前と同じ花。キーワードだけは憶えている。けれどもそれ以外のことは、他の記憶に蔽いつくされ見えなかった。

「雨、止まないね」

結局私にはこんなことしか言えない。天気の話なんて、ありふれた手段。

「そうだね。酷くなっている。ところで、傘は？」

持っていない、と答えると、彼はここまでどうやって来たのか問うてきた。電車と歩き、素直にそう答える。

「それじゃあ、駅まで送っていくよ。今日はこれ以上作業する必要もないから、僕も家に帰る」

「え、あ」

ロサが靴を履き始めた。私は膝立ちになりしばし戸惑っていたが、やがて彼に従う。湯飲みに入ったお茶はまだ飲みきっていなかった。きっと彼もだろう。最後まで手をつけるのを見なかった。

真っ赤な傘の下にいた。黒いプラスチックの柄を、私

が右手ロサが左手で握っている。小屋から出る直前、こういう風に持つようロサが言ってきた。彼の背が高いから、掲げた腕が少し辛い。変な感じだ。私の手のちょっと先に、ロサの手がある。何だか、同じ枝に生っている果物みたいな気持ちだ。工場沿いの道を二人で歩いていた。歩道はところどころひび割れ、窪みには雨水が溜まり始めていた。フェンスからはみ出た針葉樹の枝が、時々傘のナイロンに触れくすぐったいような重さを与える。人通りは殆どない。四車線の大きな道路に面しているから、車だけは多く通った。赤いテールランプが雨に霞んで、見ると急に疲れてくる。あの点滅の仕方や、点いた時に車の速度がだんだんと落ちていくところ。そんなものが体の奥に染みて、この雨の中倒れてしまいたいと思った。水溜りに服を浸して眠っても、今なら温かでいられる気がした。

道には点字ブロックなど敷かれていなかったが、ロサの足に迷いはない。駅はここから真っ直ぐ歩いて、工場の敷地の角に差し掛かったら左に曲がり、楽器屋と居酒屋と薬局を通り過ぎるとある。これと向かいの通りには花屋とコンビニ、一階がゲームセンター二階がカラオケ屋の建物などがあって、さらにそこから路地に入り少し奥に行くと、スーパーとデパートの中間ぐらいの店があった。唐突にロサが、その店の地下にある食品コーナーに行きたいと言い出した。私が驚いていると、

「今日は時間が早いしこんな天気だから、店も空いてるだろ。人がいない時に買い物したい。君は？」

こんなことを言った。終わりのは、私も一緒にどうかと聞いているらしい。頷きかけてうんと返事する。ずっと無言のままだったというのもあるが、ロサがそのような場所に行きたいと言ったこと自体に動揺していた。ロサだって勿論人間で生きていて、飲むし食べるし排泄するのだろうが、そのようなイメージがまったく沸かない。そういえばさっきも、とうとう彼がお茶を飲むところを見なかった。彼は無機物的であり有機物的だ。生を営んでいる箇所は見つからないのだが、彼の存在自体が生そのものなのだ。声も熱も重い。一つの言葉に置き換えられないから、脳じゃなくて体に響いてくる。彼から与えられた感覚の一つ一つを、足の指を動かすみたいなリズムで思い出すことが出来た。

駅に近づくにつれ、だんだん歩道が整ってゆく。今歩いている道は茶と白のレンガに、点字ブロックが敷かれていた。ロサはそれを意識的に踏んだりはせず歩く。鳥の鳴き声を模した音がする信号機に従い、横断歩道を渡った。工場から駅側の通りへと移る。そこからまた隣の通りに移って、路地に入りしばらくすると彼の言った店に着いた。薄汚れた白い壁と、欠け落ちたレンガの隙間に雑草を覗かせるエントランス。駐車場には殆ど車が入っていなかった。屋根のあるところまで来る。ほっとし、

傘を持つ手を離した。
すると、その離した手がロサの肘にぶつかった。あ、と思い立ち止まった時にはもう遅い。すぐ脇を歩いていた彼のつま先が、私の踵を叩いた。大きな衝撃ではなかったのだが、不意にバランスを崩し、つんのめりそうになる。なんとかバタバタと二、三歩動き、それだけで済んだ。
「ご、ごめんなさい」
慌てて振り返る。ロサの顔を見た。唇がほんの僅かに震えていた。
「君は」
声音も震えているようなのは、私の気のせいだろうか。彼の元へ駆け寄る。何も言わず、その手から傘を掴ぎ取った。
「もう、屋根の下に入ったんだよ。行こう」
「ああ」
彼は頷く。私はちらりとその背中を覗き込んだ。大分濡れていた。
「ロサ」
「ん？」
何でもない、と自分から呼び掛けたのに打ち消していた。そういえばロサはずっと私の後ろを歩いていたんだった。だから私が傘を持って歩いていたようなもので、彼は、傘に掴まっていた彼は、私に。

自動ドアは手動ドアの奥にあった。彼の脇を歩いて、私がそのドアを押した。彼が中に入るまで手を離せなかった。

初めて彼に会った日のことを思い出していた。彼の足は白杖に付いて回る。そう気づいた時愕然とした。ずっと見てみたいと思っていた絵に、目の前で墨を塗られた絶望感。すぐ別な感情に切り替わったけれど、哀切な痛みは傷になり残っていた。
彼の目は見えない。神様と目隠しの遊戯は永久に続く。彼のいる世界は黒だろうか白だろうか。赤かもしれないし、黄かもしれない。あるいは模様付きであるのかも。断定する手段はない。ロサは常人の色覚を有することが出来ず、常人もまたロサの色覚を有することが出来ない。何度瞼に触れても、所望する闇には手が届かなかった。神様は彼の瞼を押さえることをやめない。きっと何滴、涙を流しても。彼は白杖に付いて回り続ける。たった一本の棒に付き従う。
うらやましい。ポツリ呟いた彼の声が、何度も何度も頭の中に浮かんでは消えていく。どうしてどうして今頃になって、こんなことばかり思う。
「ニンジンと玉葱とレタスと、あと肉が欲しい。鶏肉と挽き肉と、それから薄っぺらい豚肉。そういうのが欲し

いんだ」
「そう」
答えながらガチャガチャと音をたて、山からカゴを引き抜いた。彼に何か一言でも言われる前に終わらせてしまいたかった。
「じゃあ、ニンジンは何本欲しいの？」
大きめの声で問い掛けると、二本という返事が返ってくる。私は白杖を持っていない方の手を掴もうか迷って、結局そうしないで、ただ足音を高く響かせて歩いた。殆ど客がいないのに、店内は宣伝やら背景音やらで満ちていて少しも静まらない。安っぽい鮮やかさが喉を塞ぐ。インスタント食品のパッケージはどうしてああも光沢があって、明るい色をしているんだろう。一昨年聞いたことのある歌に混じって、レトルトカレーのオレンジが頭の中でぐるぐる回った。区分けして同じものをカラフルに並べた世界は、タイル張りの噴水のような歪み。石灰の味がする口。モザイク。迷路になってゆく視界。水は流れるまま溢れる。

――誘導する時は自分の肘を持たせてあげてください。
――食器の位置などを変えてしまうと、自分の茶碗がどれだか、分からなくなってしまうことがあります。
――雨の日は一緒に傘を掴んで歩いてあげてください。

小学生の頃の記憶。十二月の体育館。たくさんの子供達、体育座り。冷たい床、膝を抱え直す。壇上にいるのは、朗らかな声の禿げ上がった頭のおじさん。スライドに映し出された写真。黒いサングラスに白い杖の人。

――買い物は特に大変な作業です。パックにされてしまえば、お肉なんて見分けがつかないですし。あんまり触っていても、

薄っぺらい豚肉を私はカゴに投げ入れた。トサッという音とともに、記憶は全て排水溝の中へ。小さな穴に、渦を巻いて消えてしまえ。
「ロサ、全部買ったよ。レジ行くよ」
彼の方を見もせずに言った。乳製品コーナー、冷凍食品、今日が賞味期限で値引きのパン。それらの脇を急いで通り過ぎ、レジの前に来た。ロサが、
「僕が払うよ」
とリュックから財布を取り出した。カゴを置く。レジにいたのは中年の女だった。最初その店員はロサを見てから、カゴも商品も持っていないただ彼の横にいる私を見て、またロサを見て、そしてこう言った。
「新しいヘルパーさんですか？」
ロサは何も答えなかった。薄ら笑いさえしなかった。店員は不機嫌と困惑の混じった笑顔を、今度は私に向け

てくる。ロサと同じく答えなかった。それだけ示してしまえばあとは何のやり取りもない。苛立ちを隠さない声に従って金額を払い、私達はその場を離れた。カゴの中の商品をビニール袋に詰めようと、近くの台に移動する。カゴは私が持った。詰めるのはロサの役だ。一度触ればだいたいの検討がつくらしい。あまり迷わず、重いものから順に袋詰めしている。それをぼんやり眺めていると、視線を感じた。周囲を見渡す。さっきの店員がじっとこちらを見つめているのが目に入った。その店員の弛んだ頬や、染みだらけで皺だらけの顔。絡まりパサついた髪。不自然に膨らんだ二の腕。袖を捲くった腕が腐ったハムのようだ。その皺も、油も。醜悪の塊。言いようのない怒りが湧き起こってくるのを感じた。

「何の用ですか」

私は聞いた。店員はほんの僅かにぎくりとした後、またもや感情が丸見えで下品な笑いを浮かべ始める。本当に、にたにた、と。ロサが袋をいじる音が止んだ。

「ヘルパーさんなんかじゃない」

真っ赤な傘を握り締める。骨が軋み、水滴が手を濡らした。

「私は、ロサのヘルパーさんなんかじゃない！」

叫んだ瞬間涙が溢れた。混乱する頭の中、鉄格子の砕ける音がした。回復した羽は鉄粉に飲まれて、今度こそ飛べなくなる。羽毛の隙間に入り込んで、体を重くする。

気がつけば店から駆け出していた。真っ赤な傘を、非常灯のように掲げて。あの店員が何か言って、少しでも私達のことを汚さないように。それだけを祈って耳を塞いだ。

元々そんなに長い距離ではないから、駅がすぐ見えてきた。雨は激しさを増している。そんな中、傘を差しているとはいえ全力で走ったから、服にたくさんの斑模様がついた。ゲームセンターとコンビニを通り過ぎ、花屋の前に差し掛かった時。ふと誰かに呼ばれたような気がして、振り返った。

「待って」

若い女に呼び止められたと思って、振り返るとその通りだった。

一瞬で綺麗な人だと思った。一つに結んだ髪、白い肌。黒さの際立つ目と眉は、それ自体が強い意志を持っているかのようだった。水色のシャツに、エプロンとカーディガン、ジーパンに薄桃色の傘。ほっそりした体躯はありふれたものなのに、雑踏の中でも目立ちそうな人だと思った。形のよい唇が声を出す。

「それは———の傘ですか？」

ザッ、と車が水溜りを跳ね上げる音がした。隣の通りなので私達に被害はない。二人以外に、人はいなかった。

先が駅で行き止まりなので、車も少ない。空から見たら赤と桃色の円が、くっきりと浮かびそうだった。苔と泥の匂いがする排気の中で、息は白く染まる。

「その傘、――のですよね？」

私は答えられなかった。彼女の発する男の名前。込み入った響きで上手く聞き取れない。二歩、三歩と彼女が私の方へ向かってくる。私は否定することも逃げ出すことも出来なくて、ただその場に突っ立っていた。激しい雨に世界が切り取られる。彼女と二人、長方形の狭い箱の中にいた。

「どういうつもりですか？」

女は私に言った。真っ直ぐな目に内側から糾弾されているようだった。

「あそこの路地から、走って、出てきましたよね。大急ぎで走ってましたよね。あなたあの人のこと」

「置いていきました」

黙っているつもりだった。誤魔化してこのまま何もかも忘れて、もうここに来ないつもりだった。でも、見つけてしまった決定的な証拠。私が弱者を虐げてしまったことは、きっと誰の目から見ても分かる。赤い天幕とその上に踊る黒字に、目を刺された。

――私は目が見えません――

三ヶ所、どこからでも見えるよう、縦書きの一文。その部分だけ影は濃く映る。大人しいのに、心臓をえぐり取るような慈悲の懇願。

私は告白を続けた。

「あのお店に、目の見えない人を、一人、雨が降っているのに、傘を奪って、置いていきました」

軽快な音が響いて、頬に鋭い痛みが走る。女に平手打ちされていた。痛みはインクを紙に落としたように広がっていく。手で触ると、痺れが伝わってくるようだった。

「何を考えているんですか？」

女の顔がすぐ目の前にあった。この人の怒る顔は美しい。私はそんなことをぼんやり思った。口も鼻も歪めないで、目だけが燃えている。

「どうなるか、分かっているんですか？　店の中にずっといられればいいですよ。でも、そうはいかない。外に出たら、どうなるか分かります？　歩いている途中、もしも誰かに押されて知らない路地に入ってしまったら、あの人は何時間も雨に打たれて彷徨うことになるかもしれない。死んでしまったって、おかしくないんですよ」

彼女の手が黒いプラスチックの柄を掴んだ。強い力で私の手から奪い取り、軽い木でできた柄を押し付ける。

「あなたは最低です」

言い残し女は去っていった。水溜まりにスニーカーを突っ込んでも、何も気にしないで走っていった。その姿を見送る。私はしばらく動けずにいた。電子音が鳥の鳴き声を真似るのを数回聞いた後、駅に向かい歩き始めた。

切符を買って改札を抜ける。丁度ホームにやってきた電車に、慌てることなく乗り込んだ。

「これもバラなの？」

「ああ。ロサ・カニーナ。ヨーロッパでは最も一般的な野生バラさ」

「ロサ……あなたと同じ名前なのね」

そのバラを見せて貰ったのはまだ五月の頃。雨の気配のない穏やかな日中だった。小指の関節程しかない葉の上に、同じく小さな花。門付近の林で咲いていたそれが、バラだと最初気づかなかった。日本でいうと桜や梅に似た形。バラ独特の立体的な連なりを持たない、一重の花だった。バラと言えば最初、渦巻き尖っているイメージしかなかったので、とても新鮮に感じた。

「別名、ドックローズ。犬のようにありふれて役に立たないから、という説もあるけど大嘘だ。犬にとって役立つからこの名前なんだよ。犬の目の治療や狂犬病に効果があるらしい。それに」

ふふっと笑ってロサは花弁を一枚、人差し指と親指の間に挟んだ。花弁を擦りながら続ける。

「九月にはこれが実をつけるんだ。小さな実だよ。十月になると真っ赤に色づいて、それはそれは愛らしいんだ」

器用な唇が子供のような笑みを浮かべた。まだ五月だから、私の態度は少しぎこちない。それでも花に近づいて、見て、彼に色を伝えたかった。私が彼に歩み寄ると、白杖を持っていない方の手が伸びてくる。戸惑う右手で服の感触しか分からない程度に、彼の脇腹に触れて囁いた。

「綺麗な色。何て言うんだろう。ちょうどいいピンク。ふわふわしてて、妖精の羽みたいな。すごく薄い花弁で、小さい緑の葉が透けて見えるの。そこが幻想的。中央の黄も鮮やかで明るい色」

花弁が風で揺れた。頬に置かれた手が動き、頭を撫でてくれた。

「ロサっていうのはラテン語なんだ」

彼が嬉しそうに笑っている。表情にそう確信させられた。単純に持ち上がった、美しい口角。

「リンネがラテン語で生物の分類をしたから、全てのバラはロサという名前の集団なんだ。そして僕もそのロサ、さ。僕もなんだよ。君は女神で僕はバラ。素敵だね」

声を出そうとしたら出来なくて、ただ彼の胸に額を押し付けた。心臓の鼓動は聞こえなかったけれど、彼という存在の流れる音を聞いた。この流れの中に自分もいるのだと思えた。私の手は字を書くためでも、涙を拭うためでも、針を動かすためでもなくて、彼に触れるために生まれてきたのだと。そう錯覚してしまうくらいに、尊い時間だった。彼の中に入って自分を見ているみたいな

気持ちが安心する。あの時間なら何も迷うことなんてなかった。

庭師と女神。なんて直線的で固い絆だったんだろう。互いの幻想を以てしか会えないから、相手のいる場所を憶えて、そこにいると信じて手を伸ばさなくてはならなかった。何度も触れ合う度に、薄れていった不安。願いが毎回叶えられていくことがあまりに愉快だった。相手のいる場所を侵して、ずっとそこにいたいと思った瞬間、暗転する世界。私達はおとぎ話のようだった。森の中でいつしか不道徳を抱いた少女は、もう少女ではなくなる。私は醜い子馬になって、外の世界へと駆け出した。温かくて冷たい手の平が、繋がる場所を失っただなんてこと、まったく、気にもしないで。

ロサ・カニーナを見終わった後、彼はその実からお茶ができることを教えてくれた。彼に手を繋がれ歩いていた。――十月になったら一緒に摘もう。包丁で切って、種を取り出して干すんだ。味が女神のお気にめすかは、分からないけどね――目を閉じて彼の声を聞いていた。薄い、暗闇の中。手だけしか握られていないのに、抱かれて運ばれているような気がした。まるで小さな、赤ん坊のように。

無邪気に私達は信じていた。晴れ渡った秋空の下、赤い実を手の平いっぱいに掬って、笑い合える日を。穏やかな不安を無視して、ある種の限界に気づかない振りをして、甘い希望に縋った。ずっと続くと思っていた。信じていた。

傘を差さずに駅を出た。駅に向かう人波に逆らって歩く。雨の中、持っているくせに差さない私は異様で、多くの人に見られていた。でも、差す必要なんてないんじゃないかと思う。濡れていけないものは何一つ持っていない。紙のたくさん入った鞄も、電子機器も、高価な洋服も、誰かが心配してくれるような体も。何一つ持ち合わせていないのだ。あるのは、このまま雨に濡れていたいという思いだけ。やがて路地に入り、一人になる。雨音が体の中まで響いているようだった。

ここでも向こうでも、雨が降っている。世界は繋がっていた。箱庭なんてなかった。あの庭に幻想があったのではない。幻想は私達が作り上げていたのだ。私は彼の彼に対する、彼は私の私に対する幻想を見ていた。

私が欲したのは薄暗闇。私は光が嫌いだ。何もかもはっきりと映し出すようで。鮮やかな色を付けて誤魔化すようで。人々が絶えず作り上げる証拠と嘘。その空間は青白き死者でさえ、スポットライトの中に引き出す。耐え切れなかった。曖昧で温かな薄墨に溶けてしまいたかった。

ロサが欲したものはなんだったんだろう。きっと薄明

かり。私は想像する。音の端に感触の端に、こびり付く美しさだけで彼の欲望は終わらない。彼以外の殆ど全てが持つ権利。視覚に彼は焦がれた。ありふれた傲慢さが常人の権利というのならば、まさに私は女神にふさわしい。一方的な憐れみも偏見も、女神は持っていなかった。舞い散る花弁と咽ぶ程の香りに、埋もれていたかったのは、堕ちる夢を見た天使。見せかけの閃光を目指して、餌をやった鳥の青はペンキ。愚かしいということを、馬鹿にする人間はきっと人ではない。愚かしさを軽蔑したら、人のどこを愛せというんだろう？　誰も聞いてくれない叫びを、私はただ胸の内で反芻した。

昔、彼が私に箸で食事を与えないのを訝しんだことがある。どうして小鳥のように扱わなかったのか、と。当たり前だ。彼には出来なかったのだ。箸なら恐らく持てただろう。けれど食器や私の口の位置を、正確に把握することが出来たろうか。そんなことをしようと思えば、無様になる自分を彼は知っていた。彼には大きな障害がある。それでも、先に幻想を壊したのは私の方だった。

私は彼を愛してしまった。

愛さないようにしようと思って、私は世界に飛び込んだ。なんて愚かだったんだろう。愛さないようにと思った時点で、人はもう愛しているのだ。気持ちを止めることなんて出来ない。行かないようにしようと思って、行かないことは出来る。だがこれは、行きたいという思いを認めたことに等しいのだ。私はロサの愚かさを愛している。醜い小鳥を女神だと信じた青年。飽きられたとしても、介抱してくれたその手の、感触を忘れられない。

感情は止むことのない雨だ。隙間なく空間を貫く、容赦ない矢だ。誰か、誰でもいい。私の後ろで傘を差していて欲しい。降り止まない愛しさと哀しさが、この胸に溜まるのをどうか止めて。叫んだってそんな人現れないこと、分かっている。それでも数分待ってから傘を開いた。灰色の中に桃色がパッと咲いた。